

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第 卷九十三第

行發日一月八年九和昭

哀辭
故田島博士近影及署名
故田島博士原稿及京大弓道々場における博士

論叢

骨牌税に就きて……………法學博士 神戸正雄
供給曲線の性質……………文學博士 高田保馬

時論

輸出統制の諸問題……………經濟學博士 谷口吉彦

研究

貨幣的景氣論史……………經濟學士 柴田敬
金物價と貨幣價值安定……………經濟學士 松岡孝兒
アダム・スミスの廉價即豊富論……………經濟學士 白杉庄一郎

記事

田島博士逝く
故田島博士年譜及著書論文目錄
追憶文

織田 萬 神戸 正雄 山本美越乃 財部 靜治
河田 嗣郎 本庄榮治郎 小島昌太郎 大國 壽吉
汐見三郎 黒正 巖 田島 順 石川 興二
谷口吉彦

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

研 究

貨幣的景氣論史 (下)

柴 田 敬

三、ミーゼス説

ヰクゼルによつて、貨幣によつて齎らされる特殊の攪亂は、自然的資本利子率と割引率との不一致——それは、ヰクゼル説に前提されてゐる且つミーゼス説に於ても前提されてゐる前述の假定を一應許すとすれば、物價の變動を生ぜしめるであらう——に、即ち、それ自身攪亂因たらざる事(それが貨幣の流通速度の動搖を意味せざる時)もあり、又、攪亂因たる事(それが貨幣の流通速度の動搖を意味する時)もある所のものに、歸せられたのであるが、貨幣的景氣論の本來的發展方向からの此の轉向は、ミーゼスによつて更に進められた。ミーゼスは、ヰクゼルによつてはじめられた所の、貨幣の齎らせる特殊の攪亂力の、貨幣なき場合の理論體系に對する作用の、理論的研究を、ヰクゼルの如く、一般價格に對する作用の點に局限する事なく、生産方法に對する作用の點に迄進めるの

であり、斯くする事によつて、ギクセルに於ては未だ残存してゐた所の在來の貨幣的景氣論の殘滓をも取り去らんとするのである。即ち、ギクセルに於ては、貨幣の攪亂作用による物價の變動の行き詰りは、貨幣の流通速度の限界に求められたのであるが、之に對してミーゼスは、「これでは、我々の問題の解決へは、一步も進み得ない」と考へるのである。と言ふのは、彼は、ギクセルの考へたる限界よりも前に行き詰りがある、と見るからである。「(ギクセルの考へた限界は)實物貨幣の時にしか存在しない、信用貨幣の場合には、それが金に結びつけられてゐる時でなければ、存在しない、表券貨幣の場合には、全然存在しない。のみならず更に重要な點は、其の限界は遙かに遠い所にあるのであり、それに達する迄には、随分多くの流通手段を供給し得る餘地がある事になる。それでは、此の廣い限界内ならば、銀行は、どれだけでも勝手に、割引率を低下せしめ得るであらうか? 決して否。」²⁰⁾これが彼の立場である。従つて彼は、「唯一つの發券銀行しか無い所の自足的國民經濟(又は、一國又は全世界の發券銀行が同一の行動を採る場合)を想定し、更に……それから發行される流通手段は社會の信認を受けてゐて、何等の障礙なしに、貨幣代用物として用ひられるものとする」と言ふ假定を置いて論を進めるのである。

ミーゼスによれば、彼の如き假定の下に於ては、「發券銀行は(資本市場の事情によつて……決定される自然的資本利率を自動的に回復する様な、他の諸力を、それが生ぜしめざる限り)、……貸付利率を……事實上殆んど零に近い所まで低下する……事が出来る。」²²⁾然し實際にはそれは不可能である。と言ふのは、

19) Ludwig Mises: Theorie des Geldes und der Umlaufmittel, 1924, S. 366.

20) a. a. O. S. 366.

21) a. a. O. S. 363.

22) a. a. O. S. 354.

銀行が貸付利率を下げると、必然的に、自然的資本利率を回復する様な他の諸力が、それに伴ふからである。と言ふのが彼の考である。彼はそれを次の様に説明する。「貸付利率を引下げると、……生産期間の延長が必然的に生ずる。此の新しく生産に用ひられる資本は、即ち、新しき迂回生産をはじめると言ふ仕方でのみ用ひられる。且つ、……在來のものよりもヨリ迂回的な生産をはじめると言ふ仕方でのみ用ひられる。……何となれば、短期の生産ほど最も有利なのであるから、如何なる資本も先づ最も短期の迂回生産に投ぜられ、比較的短期の迂回生産には充分に投下されて（あるからであり、従つて、在來のものよりも短期の迂回生産は、發見されるわけが無いからである）。……所が、生産期間を延長する爲には、……（生産物の出來る迄の間に）勞働者及び資本家を比較的長期間養つてやらねばならないのであり、其の爲には生活資料が増加しておらねばならぬ。²³⁾」所が、事情は次の如くなつてゐるのである。即ち、生活資料の増加は未だ行はれて居らず、従つて、生産期間を延長する可能性の與へられてゐない所に、貸付市場に於て、比較的長期の生産期間に照應する様な利率が與へられるのである。そこで最初は、生産期間を延長する事が有利に見える。（従つて、生産期間の延長が企てられる。それにつれて、生産手段の價格が上る）。此の事が如何なる結果に導くかは、極めて明かである。即ち（一定の期間の後には）、生産に用ひられてゐる資本財がまだ消費手段に成熟しないうちに、消費手段がなくなつてしまふ時期が、必ずやつて來る。……そこで消費手段の價格が上り、生産手段の價格が下落する。……即ち、自然的資本利率以下の利率で貸付けやう

23) a. a. O. S. 370.

24) a. a. O. S. 370. Zwischenprodukte とある。

とする銀行の政策によつて促された所の生産活動の増加は、最初は生産手段の價格を騰貴せしめ、消費手段の價格を（比較的）低下——絶對的には騰貴せしめながらも）せしめる。……斯くして、銀行の流通信用政策による貸付利率低下の傾向は、最初は（自然的利率率自體の低下によつて）裏書きされる。けれども、やがて反動が生ずる。消費財の價格は騰貴し生産手段の價格は低落する。即ち貸付利率は上昇し再び自然的資本利率に接近する。此の反動は、流通手段量の増加による廣義の貨幣存在量の増加によつて、貨幣の購買力が低下させられる事によつて、強められる。……」²⁵⁾

これが、ミーゼス説である。ブドゲも亦、これと同様の説をなしてゐる。²⁶⁾それは、ボエームの迂回生産の理論²⁷⁾によつて基礎付けられてゐる。而して、この點こそ、新しき貨幣的景氣論の本質である。従つて、我々は、ボエームの迂回生産の理論に一瞥を與へねばならぬ。けれどもそれは、それ自身一つの論文を要する問題であり、到底こゝでは取扱はれ得ない。（私はこれを、別の機會に詳述するであらう）。従つて、茲では、本稿の問題に必要な限りに於いてそれを顧るに止める。

ボエームの迂回生産論を吟味する場合に茲で記憶するを要する點は、所謂迂回生産期間の長短は、資本の有機的構成の高低に照應する、²⁸⁾と言ふ事及び、迂回生産論によつて爲される生産の行詰りは、現實に生産活動をしつゝある各生産部門によつて資本の運轉期間又は生産手段係數比率が異なるかどうか、労働者の消費財需要比率と資本家のそれとが異なるかどうか、と言ふ様な事とは離れて、換言すれば、それ等が異なる場合にも妥當するものとして、論證されてゐる、と言ふ

25) a. a. O. S. 370-2. 尙ほ、373頁迄参照。

26) Siegfried Budge: Grundzüge der theoretischen Nationalökonomie, 1925, S. 216-220, 222-3,

27) Eugen von Böhm-Bawerk, Positive Theorie des Kapitals, 4. Aufl. S. 451 ff. Derselbe: Macht oder ökonomisches Gesetz, Gesammelte Schriften, 1924, S. 279 ff.

事である。然るに、資本の運轉期間が何れの生産部門に於ても同様であり、生産手段係數比率が何れの生産部門に於ても同様であり、消費手段需要比率が資本家についても労働者についても同様である場合には、資本の有機的構成の變化は、必然的には、何等の行詰りも生ぜしめないと言ふ事は、我々の既に論證せる所である。²⁹⁾ それにもかゝはらず、ミーゼス其他によつて、其の場合に行詰りが生ずるものと考へられる事になつたのは、彼等が常に三つの假定を持つてゐるからである。其の假定とは、迂回生産期間の延長の行はれる場合にも、一、労働者の消費需要は迂回生産の延長のない場合のそれから減少せず、二、資本家の消費需要も迂回生産の延長のない場合のそれから減少せず(三、自然的資本利率は資本の高級化によつて必然的に低下する)、と言ふ事である。此の三つの假定がある限り、迂回生産期間の延長は、必然的に消費手段の供給不足を生ずる。然しながら、資本の有機的構成の高級化の行はれる場合には、労働者の消費需要が減少するか、さもなければ、(例へば同時に實質賃の上る場合の如き)資本家の消費需要の減少による投資額増加が生ずるのが常である。従つて、彼等の所論の前提は許され難いのである。(勿論、資本の有機的構成の高級化が行はれつゝ労働者及び資本家の消費需要が然らざる場合よりも増加さへする事が全然ないわけではない。資本の有機的構成の高級化が、生産物一單位當りの所要生産手段量の絶對的減少と共に行はれる如き場合には――それは必然的に利潤率の上昇を意味するのであるが――、即ちさうである。³⁰⁾ 然しながら斯くの如き資本の有機的構成の高級化は、技術の進歩によつてのみ

28) Eugen von Böhm-Bawerk; Positive Theorie des Kapitals, 4. Aufl. 1921, S. 117-121.

29) 拙稿「資本蓄積と資本の有機的構成の變化」(經濟論叢第三十七卷第四號)

30) 拙稿前掲 7-8.

可能である。技術の進歩はなくてたゞ實質勞賃の高騰によつて代用の法則上採擇される事になる所の資本の有機的構成の高級化、即ちミーゼスの取扱ふべかりし資本の迂回生産期間の延長は、必然的に、利潤率の下降を意味する。従つて、第三の假定は當然許されるが、正に其の故に、其の場合には、資本の有機的構成の高級化が行はれつゝ労働者及び資本家の消費需要が然らざる場合よりも減少せざるべき必然性はない。

斯くの如く、ミーゼス、従つて、ブドゲ、による行詰り論は當らないのであるが、然し行詰り論以外の點に於いても、尙ほ注意を要する事がある。それは、景氣變動に於て重要な意味を持つ所の資本蓄積率の變化が、單純再生産の下でも行はれる所の資本の有機的構成の變化として把握された爲めに、資本蓄積率の變化に特有なる諸事情が、従つて、貨幣の流通速度の動搖を必然ならしめる諸事情が、把握され難くなつてゐる事である。元來、低利が資本の有機的構成の高級化と密接の關聯を持つのは、ポエームに於ては、低利は高勞賃を意味し、従つて生産手段と勞働力との間の代用法則の支配によつて、後者の代りに前者を比較的多く用ひる事が有利とされるからである。然るに、現實に於ては、景氣の上昇過程に於ては、勞賃の騰貴は一般物價殊に生産手段の騰貴よりも遙かに後れるのである。それにもかゝはらず生産手段が多く需要されるのは、資本の有機的構成の高級化の爲ではなく、資本の蓄積率の増加の爲である。すべて之等の點は、單純再生産の立場のみから展開されたポエーム的理論體系によつては、説明せられ得ないのである。ミ

ミーゼスは、ポエームとは異つて、勞賃騰貴を通ずる事なしに資本の有機的構成の高級化を導き出さんとして、新たに起さるべき生産は比較的不利なる比較的長期の迂回生産である、と言ふ點に論據を求めてゐる。然しながら、比較的不利なる生産は必ずしも比較的長期の迂回生産とは限らない。それにもかゝはず比較的不利なる生産として専ら比較的長期の迂回生産が考慮に入れられねばならぬのは、それが勞賃騰貴との理論的關聯に於いて問題にされるからである。此の特定の問題聯關から離れて一般的に、比較的不利なる生産と比較的長期の迂回生産とを必然的關聯に於いて考へる事は、許され難き所である。のみならずそれは、勞働力と生産手段との間に於ける代用法則を展開せんとしたポエーム説の眞意を抹殺するものである。

迂回生産期間の延長を生ぜしめる理由に關する右のポエーム説とミーゼス説との差異を吟味する事なく、迂回生産期間の延長と消費手段の缺乏との關聯に關するミーゼス説を、更に一方的に單純化して行つたのは、ハイエクである。

三 ハイエク説

井クゼルによつてははじめられた所の、貨幣の齎らせる特殊の攪亂力の、貨幣なき場合の理論體系に對する作用の、理論的研究は、ミーゼスによつて、井クゼルの如く一般價格に對する作用の點に局限する事なく更に生産方法に對する作用の點に迄進められたのであり、且つ、そこでは、

自然的資本利子率と割引率の不一致によつて、自然的資本利子率の支配下では行はれない様な生産が強ひられる事になり、その事自身一つの反動作用を以つてこれに對抗し來る事によつて、再び自然的資本利子率の支配が確保される、と論ぜられたのである。此の所論が如何に誤つてゐるかは、前説に於て我々の明かにしたる所であるが、然し、それは兎に角、若し此の所論でよいのであるならば、攪亂及び其の回復の作用と一般價格の變動とは、論理的には無關係である。此の作用は、一般價格の變動が生じやうと生じまいと、それが何れであるとしても行はれ行る事である。従つて、ミーゼスの如く、價格變動の點を考慮する必要は無い。斯うした事こそハイエクの目指す所である。(ミーゼスの如く、此の理論を貨幣價值變動論としてあらはすのは危険である。何となれば、それは、誤解を生じ易いのみならず、景氣變動を生ぜしめてゐる諸事情の副作用——それは如何にも普通あらはれるものであるが、必ずしも常にあらはれるとは限らない——を、強調する事になるのであるから。)³¹⁾即ち「我々の期待する所の説明は、貨幣の側に生ずる所の變動の作用の研究、殊に、貨幣量のあらゆる變動の作用の研究に俟つべきものである。この作用は、それが所謂貨幣の一般的購買力の變化としてあらはれるにせよ然らざるにせよ、常に、自然經濟に成立する均衡關係を破らすにはおかぬものである。」³²⁾「……貨幣量の變化はそれが物價水準に影響しやうが、しまいが、殆んど常に各個價格の相對的高さに影響する事は明瞭である。そして生産の數量と方向とを決定するものが個々の價格の相對的高さである事は疑の存し得ない所である……個々の

31) Friedrich A. Hayek : Geldtheorie und Konjunkturtheorie, 1929, S. 62-3.

32) S. 52.

價格に對する貨幣の總ての影響を、それが物價水準の變化を伴なはうが伴ふまいがそれと全然無關係に、研究して見ると、我々は直ちに物價水準の逆數價值である一般貨幣價值なる概念が甚だしく無益で且つ不用のものである事を檢出し得るのである。而して貨幣理論の發展は近き將來に於て貨幣と物價水準との直接的關係の説明から分離するのみならず更に理論的分析の目的から一般物價水準なる概念を放逐し、換うるに相對的價格の變化の原因及びその生産に對する影響を以てするであらう事を私は確信するものである³³⁾。

以上に於て、我々はハイエク説が如何なる意味に於いて、ミーゼス説を純化したものであるかを示した。純化されたる姿に於ける理論其のものは、ミーゼス説を批判するに際して我々の吟味したる所であるから、こゝではそれを略する事が出来るであらう。

四、ストリゲル説

ミーゼス説の一方的展開は、ストリゲルによつても亦試みられてゐる。それは、ハイエクに於けるが如く、ミーゼス説に含まれたる在來の貨幣的景氣論の殘滓を取除かんとする努力としてではなく、(其の點に於てはハイエク説の結果を承けつゝ)、ミーゼス説に含まれたる新しき貨幣的景氣論に、従つてハイエクのそれに、一つの加工をほどこすものとして提出されてゐる。曰く。

「靜態的經濟(貨幣による擾亂のない經濟)に於いて迂回生産期間は t 週間、毎週の生活資料生産量は

33) Hayek: Preise und Produktion, 1931, 豐崎稔氏譯60頁。

Sであるとする。然る場合に、割引率低下によつて……迂回生産期間が $\tau+\kappa$ に延長されるとする。此の際には二つの場合が考へられる。一、靜態經濟に於いて労働者がすべて仕事を持つてゐる。信用擴張によつて勞賃が騰貴する場合、又は、二、靜態經濟に於て失業者があつて、信用擴張によつてそれ等が職を得る事になる場合。何れの場合に於ても、消費財需要は増加する。それによつて、直接消費さるべき消費手段の生産が刺激される。毎週生産し消費される生活資料はSから $u+s$ になる。だから信用の擴張生産の構造に對する作用は、二つである。イ、生産手段は迂回生産期間の延長に用ひられる。……ロ、生産手段は消費手段を急速に生産する爲めに用ひられる。そこで次の問題が生ずる。 $\tau+\kappa$ 週間の間毎週規則正しく $s+s$ だけの生活資料が……生産され得るであらうか。先づ第一の場合について見るに、それは明かに不可能である。何となれば、これまで毎週Sだけの生活資料を規則正しく供給する爲めに割當てられてゐた生産手段存在量が、今や濫用され、先づ完成財の生産が増加され(従つてその爲めに從來よりもヨリ多く生産手段が用ひられ、従つて、所與の生産手段ではもはや一週の迂回生産は行はれ難いものとなり)、更に、 $\tau+\kappa$ 年後にはじめて消費手段に成熟する様な設備が作られ(従つてその爲めに從來よりもヨリ多く生産手段が用ひられ、従つて、所與の生産手段ではもはや毎週Sだけの生活資料を供給し難いものとなり)、…… $s+s$ だけの生活資料を毎週 $\tau+\kappa$ 期間供給する事は、尙更不可能となるから……第二の場合について見ても事情は全く同一である。³⁴⁾」

ストリグルに於ては、信用擴張によつて結果するものは消費手段の缺乏ではなくて生産手段

34) Richard Strigl: Lohnfonds und Geldkapital (Zeitschrift f. Nationalökonomie Bd V. Heft 1) S. 39-40. Fußnote.

——恐らくはシュピートホフの所謂間接消費財——であり、其の缺乏を來す事情は迂回生産期間の延長だけではなくて更に其の上に消費手段生産の増加である。此の二つの點に於いて、ストリグル説は、ミーゼス、ブドゲ及びハイエク説と斷然異つてゐる。而して此の背離の故に、其のまゝでは、恐慌は、シュピートホフ以來一般に認められて來た様に間接的消費財の過剰生産との關聯に於いて發生せずして、却つて、間接的消費財の過少生産との關聯に於いて發生すべきものとなつてしまつてゐる。而も、右の背離は實は、迂回生産期間の延長に應ずる爲めに必要と考へられてゐる所の労働者の生活資料の増加に對して、ミーゼス及びハイエクはその増加を保證するものなしと考へ、ストリグルはその増加を間接的消費財の犠牲に於いて保證さるべきものと考へた、と言ふ點の差異に起因してゐる。即ち其の何れも、若し迂回生産期間の延長に應ずる爲めに労働者の生活資料の増加が必要であるならば、迂回生産期間の延長が資本家によつて——それは所謂強制的貯蓄によるものであるとしても——行はれるものである以上、其の要求は、資本家が然らざる場合には消費するであらう所の生活資料を労働者の方に即ち投資に差向ける事によつて、滿されるであらう、と言ふ事を、全く看過してゐる。而して此の事こそ、此の新しき貨幣的景氣論に貫く、根本的缺陷の一つである。

ストリグルは、尙ほ、勞賃の騰貴なくして資本の高級化の行はるべき第二の場合に言及してゐる。これは一つの誤謬である。然しそれは、彼の所論に何等貢獻してゐないのみならず、此の種

の誤謬については、ミーゼス説の批判に際して我々の既に論究したる所でもある。従つてこゝではそれに觸れない事にする。

む す び

以上に於て私は、ボクセルにはじまつた新しき貨幣的景氣論が、如何に、貨幣が攪亂作用となる所以を眞にその在る所に求めず、攪亂因たる事もありたらざる事もある所の、自然的資本利子率と割引率との不一致の點に求めたか、此の本來の貨幣的景氣論からの轉向が、ボエームの理論と結びついて、本來の貨幣的景氣論とは異つた點に其の理論的基礎を確立し得るものとの誤れる確心を得つゝ、如何に本來の貨幣的景氣論の最後の因縁までも振り捨てる事となつたか、而して其の理論的基礎が如何に許され難き假定に立つたものであるか、を明かにした。この研究は全く、貨幣的景氣論發展自體の看點からせるものであつて、斯かる理論的發展が事實の發展と如何に關聯したかの看點からせるものではない。私の研究を前者の點に限つたのは、現在の私の研究課題の故であつて、他に理由があるわけではない。(完)

註 本稿が編輯委員に渡されて後に、恩師高田保馬教授の論文「ハイエクの景氣理論」が經濟學論叢五月號に發表された。問題の性質上よりすれば、此の論文は 本稿に於いて、當然参照せらるべきであるか、右の次第により、今はそれに觸れない。